
クロフユ堂～魔具と双子と後なにか～

走る地軸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロフユ堂〱魔具と双子と後なにか〱

【Nコード】

N7210D

【作者名】

走る地軸

【あらすじ】

これは、魔具屋〱クロフユ堂〱の続きである。とある双子と同棲生活を送ることになる、魔学士クロフユのちょっと変わった日常と、冒険の日々の物語。

冒険に出かけよう。(前書き)

この物語は作者が書いた『魔具屋〜クロフユ堂〜』の続編である。
お読みになられて無い方は、先にそちらをお読みになってから、も
う一度おこしく下さい。

冒険に出かけよう。

アレから彼女達は宿を引き払い、ボクの屋敷に住む事になった。

元々一人では広すぎるくらいの屋敷、居住スペースは余っていて、引越しは楽にすんだ。

一緒に暮らすとなると、ドキドキハプニングとかあるかなあって思ったけど、そう言つのも今の所ない。

まあ、初日に彼女達がバスルームを使うときに……。

「覗いたら斬るからな？」

「へ？覗きなんてボクの美学に反するからね、しないよ。」

「そうですよ姉さん、いきなり疑って掛かるなんて、失礼ですつ……」

「だから、一緒に入ろう!!」

と言ったボクを縛って、屋根裏部屋に放りこまれたのも、いつか良い思い出になるだろう。

………何がいけなかったんだろう？

ま、それはともかく、彼女達が来て一週間がたった。

宿泊代、代わりに、店を手伝ってくれると言ってくれて、店もそれ

なりに繁盛している。

「と言うわけで、冒険に行こう。」

「ふえ？」

朝食の食パンを啜えたリーナさんが、可愛い声をだしてる。

「行くと言っても、あてはあるのか？」

リーナさんが、手に持ったフォークを置いて答える。

ちなみに今は朝食中、メニューは、トーストと目玉焼き、グライガラダのサラダ、飲み物は、
ボクとリーナさんがコーヒード、リーナさんが以外にもオレンジジュースである。

ちなみに、作ったのはリーナさんだ。

本人曰く、「こんな、苦い物は飲み物じゃない」との事だ。

「ま、今日はとりあえず、二人の能力を見極めたいのと、冒険の基礎を教えたからね、二人とも、ダンジョンとかは初めてなんですよ？」

「うむ、故郷からここまででは、キャラバンと共に一緒に来たからな、戦ったのもスライムやゴブリンくらいだ。」

「そうですね、それに、キャラバンの人達と一緒に戦ったので街道のモンスターも私達だけで戦ったわけじゃないですし。」

「ん、でもゴブリンと戦った事あるなら話は早いよ。今日はゴブリンの洞窟に行こうと思ってたんだ、二人さえよければ、昼間でに準備をすませて、１時に出発でいこうと思う。お店は今日は閉店って事で。」

「私は、いいですよ。」

「そろそろ、剣を振るわないと、腕が落ちそうだしな。」

と、行ってもライナさんは、毎朝、起きて素振りをしていたけどね。

「んじゃ、決定って事で、回復アイテムなんかは、ボクが用意するから、えーっと、ライナさんは、軽めの携帯食料と、飲み物を、リィナさんは、基本的な医療品の準備をお願いできるかな？家にある物なら、なんでも持って行っていいから、場所が分からなかったり、買わなきゃ揃わない物があつたら、声をかけてよ、お金渡すから」

「了解した。」

「わかりました。」

二人の良い返事を聞きいて朝食をすませ、ボクは準備に取り掛かる事にした。

ボクは、この時予想もしてなかったんだ……。この後、あんな事になるなんて。。。

冒険に出かけよう。(後書き)

連載って、話の切り方がわかんない。

短すぎるのか長すぎるのか・・・。

ま、気長にボツボツ書きはじめてみました。

感想、評価気軽にどうぞ。

というから頼むから感想お願いします。O r z

冒険の準備をしよう。

「ロープも用意したし、松明は・・・あ、これでいいか。コレは・・・今回は置いていくとして、こっちを持って行って、グリーンポーションは六つでいいか。念の為にレッドポーションを三つと・・・こんなもんかな？」

ボクは研究室の道具を選別しながら、道具袋に入れていく、重すぎても邪魔だし、かと言ってアイテム不足じゃ困る。ゴブリン洞窟とは言え、一応きちんと揃えておく。

「よし、ほかの二人の様子でも見にいこうかな・・・ライナさんはキッチンかなあ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ。」

キッチンを開けたボクは、あまりの光景に一瞬意識を失いかけていた。

「な・・・何してるのかな？」

「ああ、クロフユ、今ビーフストロングガノリアを作っているんだ。」

「ああ、なるほど。」

ビーフトロガノフじゃない？と思ったけど一生懸命言葉は飲み込んだ。

というか、ビーストロガノフは少なくとも虹色をして不思議生命体じゃない。

そう、ライナさんが作っている、鍋の中では虹色の液体が……
叫びを上げていた。

「キシヤアアアアアア」

「こ、こら、暴れるな!!」

いったい何を入れたんだろうか、危険な物は、全て研究室に置いてあるし、通常の食料品以外キッチンに置いていない。ちなみに研究室にずっといたけど、取りに来た様子はなかった。

「あ、いや、軽めの携帯食料っていったでしょ？サンドイッチとかおむすびとか片手に食べれて、皿がいらない物じゃないとだめだから……。持ち運びに困るでしょ？」

「そうなのか、すまない、勘違いをしていた、というかクロフユも人が悪い、そうならそうと最初から言ってくれば良かったのに」

「そうだね、次からお互いきをつけようよ、ハハハハ」

「飲みの物はオレンジジュースでいいか？クロフユ達はコーヒーのほうがいいか？」

「んー、飲み物は、行く場所によるんだけど、今回は水にしておこう、表の井戸から汲み上げてそこにぶら下げてある皮袋に入れて置いて。」

「場所によるのか？」

「雪山なんかに行くんだったら、暖め直して飲める紅茶やコーヒー、お酒つてのも有りだね。火山とか砂漠、暑い所にいくんだったらオレンジジュースも有りだと思うよ、カロリー高いからね。でも、今回は水がいいかな？傷口の消毒に使えるから。もちろん、水は、寒い所でも暑い所でも必須だからね。」

ちなみに、食料もパン、チョコ、クッキー等、カロリーが高い物や腹持ちが良い物がいいのである。

火を使つて調理しない物がお勧めだが、長期間に渡る時は、餅や乾パン、干し肉等保存が効く物をもっていくのがベストである。

ま、最近では冒険用の高カロリーバランス栄養食と言う、ブロック状のクッキーみたいな食べ物まで販売されているが、今回は近場な感じでサンドイッチでもいいだろう、といかサンドイッチなら斬って挟むだけなんで、生命は生まれないと信じたい。

「な、なるほど。勉強になるな。とりあえず、井戸に水を汲みに行ってくる。」

レイナさんが皮袋を持って井戸に向かったのを確認して。

「どうしようか……これ。」

今にも、鍋から飛び出し人間を襲いだしそんな虹色生命体を見てボクは……………。

おもむろに、いつも一本は完備しているエリクサーをかけてみた。

「ヤットシネル・・・・・・・・アリガトウ」

エリクサーに反応して蒸発して消える虹色生命体。

「何も聞こえない何も聞こえなかった。ここには何もなかった。うん。」

そうしてボクは、ライナさんに厨房を任す事はやめようと決心した。

「さささて、リーナさんはどうしてるかなあ・・・・。」

サンドイッチが無事出来上がる事を祈りつつもリーナさんを探して厨房をでた。

冒険の準備をしよう。(後書き)

ま、こんな感じでコメディ風味に、説明多めですが、何て言うんだろ、ファンタジーゲームとかで省かれている、冒険の準備の大切さ的な部分を書きたかったので多め、あーこの先も説明多くなるかなあ・・・。

冒険の準備完了!!

さて、さて、リーナさんはどうなってるのかな……。

「あつ、クロフユさん、どうです?」

「どうです?……って……」

あまりの状況に誤魔化しもきかなかった。

彼女が抱えてるリュックは優に1メートルの高さがあり、横幅50センチ位だろうか…。

「えっとね、リーナさん。ボクが頼んだのはなんだったかな?」

そうだ、きつとそうだ、ボクが間違えてかたっぱしから突っ込んで
けって言ったんだきつと。

彼女は少し考えるようにして、愛らしく小鳥のように首をかしげて

「基本的な医療品ですよね?」

うん、どうやらボクは間違ってたようだ。

「あのね、基本的な医療品ってのは、包帯、消毒液、テーピングテープ、痛み止め位でいいんだよ」

まあ、念をいれるなら、骨折用の添え木板や、傷を縫うための糸と

針等いろいろあるが、今回はゴブリンの洞窟と言う事もあり、そしてボクの魔道具達はその変わりを充分に果たしてくれるから割愛する。

「へ？じゃあ、体温計や風邪薬や酔い止めや虫下しとかは・・・。」

「風邪っぽい人がいればいれば、必要かもしれないけど、今はいないよね？そして長旅するわけでもないし乗り物にも乗らないし、今回は食料をもっていくから、虫下しもいらないよね？」

ボクがそう言う तरीナさんは、驚いたような顔をして

「ああ、確かに！！すみません、私ったら念には念をとっているんな物を」

シユンとしている、しかしここできつく言って置かないと、状況に沿った判断能力と言うのは、冒険者としては絶対に必要なもので

「しゅゝん」

可愛いから許すゝ

「ま、まあ、兎に角さっき言った物を綺麗にまとめて置いて、その他の物はちゃんともしといてね。」

「はい。」

そんなこんなで準備完了だね。

冒険の準備完了!! (後書き)

どうしても、書けないというか、一つの話として斬る場所間違えてたことに気づいた。

前の話数に組み込んでおけばよかった。

まあ、今回短めですけど、よいよ、次回、冒険に出発します。
お楽しみに。

冒険は気をつけよう。

剥き出しの大地。

視界を遮る暗闇。

合間、合間に頭上から入る木漏れ日。

ところどころに生える光ゴケ。

ゴブゴブゴブ！！と言う低い声。

そう、ボク達はゴブリンの洞窟に来ている。

「何、ボーっとしてるんだクロフユ、援護くらいしろ！！」

ゴブリンの持つ石斧を刃で受け止めるライナさんが怒声を飛ばしてくる。

「母なる大地の女神の名の元に、身を守る守護の盾を！！」

リーナさんがライナさんに大地の守護を掛ける。

瞬間、盾にはじかれるように、ゴブリンの石斧がライナさんの刃から離れたところを返す刃で

「はぁっ!!」

掛け声と共にゴブリンを薙いだ。

「どういう事だ。クロフユ!!」

ライナさんが、ギロリと睨んで来る。

まあ、それも仕方ない、戦闘が始まってからボクは一番後ろで口笛吹いてただけだからね。

別に、考えもなくしてたわけじゃなく……。

「0点。」

「はっ?」

「まあ、おお負けに負けて40点つてところかな。言っただでしょ? とりあえず、二人の能力を見極めたいって。」

「確かに聞いていたが、自分はぼーっとしているだけで、こちらはきっちり、ゴブリンを倒してる。何が問題があるとしても言うのか?」

ボクが高みの見物をしていたのが、ライナさんの琴線にちよっぴり触れたらしく嫌味たらしく言ってくるが。

「一つ、ゴブリン一匹にてこずりすぎ、って言ってもこれは、ライナさん自身の腕の問題？ 実践経験の問題かもしれないけど。二つ、あそこで、守護魔法使うくらいなら、後ろから石でもぶつけて、ゴブリンに気を逸らす方が効果的だよ。」

「すみません、焦ってしまって・・・。」

リーナさんが、謝って来る、まあ、分かってくればいいけど・・・。それに比べて、ライナさんは・・・。

「なんだと、そこまで言うなら、クロフユお前ならもっと簡単に倒せるって事だろう、次はお前一人です」

ボクはライナさんが言い終わらないうちに・・・。

「三つ、敵の死亡確認はきちんとしましょう。」

自分で言い終わるか、言い終わらないかのタイミング、ボクは袖に忍ばせてある、ソレを一本リーナさんに向かって投げた。

「えっ？ え？」

正確にはリーナさんの後ろ目掛けてだけど、いきなり何かが自分の方にとんできたソレに驚きふためく。

しかしボクの投げたソレは狙い通り、リーナさんのわずか横をとり

「ゴブゴブゴブー!!!」

いまにも、リーナさんを石斧で殴り倒そうとするゴブリンに直撃し・
・・・ゴブリンもろとも炎上した。

「え、まさか・・・。」

驚きの声を上げるリーナさん。

「ゴブリンは、ずる賢い性格だからね、死んだ振りなんて常套手段。
何と戦うとしても相手の死亡確認するか・・・。」

「ゴブツ、ゴブツ・・・・・。」

香ばしい匂いをあげて、消し炭になるゴブリン。

食欲はあまりそそらない。

「確認する意味もないくらい徹底的にやりましょう。」

「うっ、私たちより冒険者として先輩と言うのは嘘じゃなかったみたいだな。」

悔しそうにライナさんが口にする言葉に笑って返す。

「まあ、最初の戦闘に参加しなかったのは謝るよ、ごめんね。都合よくゴブリン単体に出くわすなんてそうそうないからね、良い見極め相手だったから。」

「あの、今のは、もしかして無詠唱魔法ですか？」

リーナさんが、不思議そうに尋ねてくる。

無詠唱魔法と言うのは、詠唱なしで魔法を打てちゃう最強スキルの一つだ、使いこなせば大魔法の連打が出来ると言う恐ろしい話だけど。

「残念、今のは、魔法じゃないよ。コレだよ。」

ボクは袖から、赤い液体が入った試験管を取り出す。

「液化ファイヤーボール。魔法銃に使われる魔法弾ってしてるかな？あれの手投げ弾だとおもってくれればいいよ。」

「えっと、魔法弾ってとってもお高い物で良い物なら城が建ち、安い物でも、半年は遊んで暮らせるとか……。」

「ははは、まあ、そうなんだけどね、正確に言うと魔法弾とは関係ないと言うか。ボクのオリジナル理論でね、魔法を液化した物なん

だよ。ファイヤーボールを液状化して封印してあるだけ、材料は試験管と井戸の水と誰かのファイヤーボールとボクの技術だけ。」

もつとも、保存方法が難しく、とても一般化するに耐える物じゃないんだけど、それは端折って置く。

「やっぱり、クロフユさんって凄いですねえ。」

「それほどでも無いけどね。」

笑って返すと。

「ど、どうでも、いいけど、先に進むぞ……。」

大きいこと言っておいて、立つ瀬が無いのか、それとも、魔術の話が分からなくて置いていかれたのが嫌なのか、先に進み始めるライナさん。

「前衛が後衛を置いていくなんて駄目だよー。」

「まってくださーい」

あわてて、リーナさんと追いかける。

ボク達の冒険は前途多難である。

冒険は気をつけよう。（後書き）

久しぶりの更新です、

ちなみに、時々ライナとリーナがレイナになってたりしてたのも修正しました。

というか、感想がほしい。

感想ください。

要望とかあれば俄然やる気が出ます。

俺と貞子もよろしく。

冒険の途中には休憩もしよう。

「そろそろかな。」

ジメジメした洞窟とした洞窟の中ボクはつぶやいた。

「何がそろそろなんですか？」

とリーナさんが問いかけてくる。

「何か罠のポイントでもあるのか？」

さっきの件で、警戒心満々で、先頭を進むリーナさんも若干機嫌が治ったのか、声をかけてくる。

ちなみに、パーティーの隊列はリーナさんが先頭リーナさんが真ん中、ボクが殿である。

前から来る敵に近接攻撃が可能なリーナさんが先頭で戦い、真ん中の安全な所でリーナさんが補助、後方からボクが魔具による支援攻撃と言うベストポジションである。

これなら、冒険なれしてるボクが、バックアタックにも気をつける事ができるのだ。

「この先にいい休憩スポットがあるんだよ。」

きつと見たら驚くだろうなあ。

「もう、休憩するのか？さっきの戦闘以来、ゴブリンも見かけないし一気に進むべきじゃないのか？」

とライナさん。

「でも、休める時に休んだ方がいいですよね。」

とリーナさん。

「まあねその休憩スポットより先に進めばゴブリンの量も増えるしね、ただ歩くだけと言っても、デコボコした洞窟を歩くつてのは、自分で思ってる以上に体力を消耗する事だからね。」

なんて言ってる間にその休憩スポットに近づいてきたわけだが。

「なんか、光ってるぞ、木漏れ日か？」

先頭に行くライナさんが、前方の異変に気づき声をあげる。

「なんだか、不思議な光ですね。」

さすが、リーナさん僧侶なだけあって、この光が普通の光じゃない事に気づくのが早い。

「ほら、そこが、休憩スポットだよ。」

冒険の途中には休憩もしよう。(後書き)

投稿遅くなってごめんなさい。

1月中にするつもりが、色々立て込んで出来ませんでした><

感想ください><

感想があれば俺は書けるんだ><

冒険は休憩中にしっかり休もう。

中央にあるクリスタルが放つ輝きの中、ボクは適当な石の腰を下ろす。

「二人ともダンジョンは初めてなんだよね？コレ何か分かるかな？」

クリスタルを指してボクは二人に問いかけた。

「なんだか、疲れがとれていくな……。不思議な感じた。」

ライナさんは立ったまま辺りを未だ辺りを警戒しながら言っている。

「これは、教会にある結界と同じ？いえちょっと違いますね……。」

「

レーナさんは、クリスタルに触れようと手を伸ばすが……。その手はクリスタルを貫通していく。

「ディフィンススポット、精霊磁器場、まー、一般的にはセーブポイントとか言われるね。教会にあるクリスタルは人工的な儀式によって作られた物だけど、これは天然物、地脈の魔力と大気のマナの量が一定に達するとお互いが共鳴してこのクリスタルの幻影と輝きを映し出すんだよ。」

ボクは、荷物の中から、お弁当を取り出しながら言う。

「おいおい、こんな所で、昼食しにても大丈夫なのか？」

ライナさんが怪訝そうに言ってくる。

「この光がある一帯は魔物が入ってこれないよ、入ってこれるとしたらドラゴン級の高位魔族か、悪意ない弱小モンスターくらいだねえ。これが街道とかの冒険なら盗賊にも気をつけなくちゃだけど、わざわざ低レベルとは言え、戦闘能力がある人しか集まらないダンジョンに盗賊がいる理由は無、高レベルのダンジョンなら、宝を横取りしようとする奴とかいるかもだけど、ここはそこまでして手に入れるアイテムが手に入る場所じゃないしねえ。ほらサンドイッチ食べようよ。」

この光の範囲はマナの浄化が常に行われているから、浄化されてない魔力やマナを持つてるモンスターは入った瞬間、全身大火傷をおつてのたうち回る事になる。ぶっちゃけて言えば、ボクの魔眼さえこの場で発動すれば、失明しかねない。

「サンドイッチ、寄っちゃってますね・・・。」

リーナさんが、弁当箱のライナさん製作の、サンドイッチが寄ってしまっているのを見てそう言う。

元々歪な形をしていたソレだが、ハム、レタス、トマトを挟んでマヨネーズ等で味つけたソレは、さすがに虹色生命体になってなく、冒険の移動によって弁当箱の中で寄ってしまったわけである。

「まあ、サンドイッチだから、たいした被害にならないでしょ？コレで手の込んだ弁当なんか作ってたら、グチャグチャになる事請け合いだからねえ。」

サンドイッチをひとつ掴んで食べる・・・、まあ味に異常は無い特別美味しいわけでも無いが不味くて食べなれない分けでもない、ま

あ素材の味がする……。と言った感じだ。次回はリーナさんに作ってもらおう。リーナさんも食べながら若干苦笑いをしている。ライナさんはちょっと不機嫌そうだ。フォローをいれとこう。

「うん、美味しい。さて、ここまで来たけど質問とかある？」

美味しいと言った言葉にライナさんの機嫌がちよっぴり治ったのを確認して二人に聞いてみる。

「えっと・・・クロフユ、今更なんだが、この冒険の目的って言うかそもそも何しに来たんだ？」

サンドイッチを食べながらライナさんが聞いてくる。

「いい質問だねえ、というかもっと早くその質問が来る事を期待してたんだけど、まあ仕方がないかな？今回は二人の能力を見るってのもあるんだけど、第一前提として、この洞窟の奥のゴ布林ストーンをとって来る事かな。」

本来事前にボクが説明しとくべきだったんだけど、何のために、って言うのを自分達で疑問に思わさせる為に黙っておいたからねえ。

「ゴ布林ストーン？なんですかそれは？」

リーナさんが、頭の上に？マークを浮かべながら聞いてくる、ちょっと可愛いぞ。

「ゴ布林族が石にゴ布林文字を彫ったものでね、まあ彼らが石にメモをした欠片みたいな物かな。」

簡単に説明する、ゴブリンたちが儀式で使ったり、手紙や目印の為に作ってるらしいが詳しい説明は割愛。

「なんで、そんな物が必要なんだ？」

おお、いい質問だ、なんで、どうして、疑問に思うことは良い事。冒険の依頼でアレとって来いと言われてほいほい取りに行く奴はただのパシリ。何のためにどうしてなのか、そこまで考え、目的意識を持って行動するのが冒険者だからねえ。

「ゴブリンストーンは別名冒険者の石って言ってね、これを冒険者ギルドに持って行くと冒険者として認めて貰えるってわけさ、コレ無しでこの町で冒険をすると、モグリって事でいろんな支援をもらえなかったり、加盟店で特定のアイテムを売ってもらえなかったりするからねえ、あと依頼も受けられないし。」

「そうなのか……。ふむ、いろいろあるのだな。」

「クロフユさんのお店の方は、加盟されてないですよ？お手伝いさせて頂いてましたけど、そんな話聞いていませんでしたし。」

「ボクの所は、冒険者協会じゃなくて、魔術師ギルドに登録してるからねえ、物を相手に売るかどうかの基準はボクの裁定に任されてるからねえ。」

お弁当を食べ終え、すぐ動くのもなんだから、ボクの持つてる地図で目的地までの距離や道順を確認して、若干の休憩を取り、怪我の確認等する。まあ、多少の怪我であればこの光の中で休憩していれ

は治るのだが、皆無傷だしポーションの出番も無い。ボクがいる限り怪我なんてさせないけどね。

冒険は休憩中にしっかり休もう。(後書き)

久しぶりの執筆。

感覚が戻ってこない。

感想まっています。

冒険の帰りは備えあれば楽々。

「えっとこれがゴブリンストーン？」

リーナさんが足元の石を拾い上げる。

「そうだね。ライナさんも適当に拾ってよ。」

「適当って言っても……。」

洞窟の小部屋とも言える小さな部屋に転がる小石、小石、小石。

はい、全部ゴブリンストーンです。

「まあ、運よくゴミ捨て場にたどり着いたみたいだね。」

「ゴミですか？」

「そそ、ゴブリンの石版の欠片だからねえ、いらない石版を碎いて捨ててあるんだろうねえ。」

「なんだかあつけないな、戦闘も1回しかなかったし。」

不満そうに言うライナさん。

そうなのである、最初の戦闘以来、襲ってくるゴブリンはいなく……。

「んーボクのせいかな、最初にボクが手だしちゃったから驚いて息

を潜めてんだろうけど。」

実際途中何匹か、逃げ惑うゴブリンを見かけたが、まあ、追いかけてまで倒す程馬鹿じゃないし・・・。

まあ、これ以上いても収穫はないかな。

「んじゃ、二人とも石はとったかな？」

「はい、大丈夫です。」

「こつちも大丈夫だ。」

「じゃあ、こつち集まって。」

リーナさんとライナさんが集まってきたのをみはらかって・・・。

丸い玉を地面に叩き付ける。

瞬間、辺りを白く眩い光が辺りを包み・・・。

「ただいま、つと」

きがつくと、店の前だった。

「え？」

「何事・・・？」

驚くリーナさんとライナさん

「帰還のマジックアイテムを使ったただだよ、家の店でも売ってる、
帰り玉。」

地面に叩きつける事で足元に転移魔方陣を開き、元々設定しておいた場所に転移してくれる便利アイテムである。

設定出来る場所に条件があり、魔力が濃い場所しか設定できないので、本来は、教会か冒険者ギルド等にしか設定できないが、ボクの店の前は人工的に設定出来るよう土地そのものを改変している。

そんな事をせずとも研究室は条件は超える程度に魔力が濃かったりするけど、誰でも記録して誰でも侵入できるようになってしまいうので結界を張っているのである。

「びつくりさせるな、そういうのを使うなら使つと説明して使う物だろ。」

「そうですよ、いきなり眩しくなって、気がついたらお店の前だからびつくりしましたよ。」

「ごめん、ごめん、ちょっと驚かせたくて」

思ったとおり、驚いてくれて嬉しいよボクは。

「とりあえず、今日は休もうか、みんな汗かいて泥だらけだし。ギルドは開いてるけど、ギルドの登録は明日でいいだろうし。」

夕日が沈み掛ける所を見て、ローブの袖から懐中時計を取り出し時刻を確認すれば8時、約7時間の冒険だったわけである。

スローペースで最奥までいったのでこの程度である。

余談だがゴブリンストーンはゴ布林を入り口付近で倒し続けければ1時間もしないうちに手に入るわけだが、強い相手からはとことん逃げ、弱い相手のみを襲うゴ布林相手にボクがついて行ってしまうた為に無駄な時間がかかってしまったのは内緒にしようと思う。

「そうだな・・・さすがに歩きつかれたからな。」

「そうですね、お風呂先に頂きますね。」

店の入り口から生活スペースへと入っていく二人。
ごく自然に脱衣所にまでついていくボク。

「.....」

「.....」

「.....」

ライナさんにつまみ出されるボク。

「うーん、いけると思ったんだけどな・・・自慢じゃ行けど共同浴場の女湯にはいつでも怒られない見た目なんだけどねえ」

実年齢を教えたのは早計だっただろうか・・・思いこの冒険を締め括るのだった。

冒険の帰りは備えあれば楽々。(後書き)

冒険やつと終了。

われながら更新速度遅いな。

というかモチベーションが保ちにくいんだよね。
なるべくがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7210d/>

クロフユ堂～魔具と双子と後なにか～

2010年10月10日01時15分発行